

〈研究ノート〉

帝国日本の膨張とその周縁で生きる人びと

——ヤマトに移住した沖縄人を手がかりにして——

林 真 司

目	次
1 はじめに	4 日本帝国の予兆
2 河原で暮らす民	5 ま と め
3 内国勧業博覧会と人類館	

1 は じ め に

わたしは数年前から、沖縄の伝統食品であるシマ豆腐について調べている。とりわけ生産者の働きぶりに関心があるので、朝早くから作業場を訪ねることが多い。湯気が立ちのぼる地釜のかたわらで、いろんな話を聞かせてもらいながら、それぞれが歩んできた人生に思いを馳せる。

いまはもう一線を退いているが、沖縄県豆腐油揚商工組合の理事長として長く活躍された砂川幸一さんからは、どれだけ多くの話をうかがったことだろうか。あるとき、砂川さんがまだ10代だった頃の話聞きながら、わたしはその情景を思い浮かべていた。時あたかも戦時色が濃厚になる1930年代のことである。

話というのは、関西に移り住んだある沖縄人（ウチナーンチュ）の暮らしぶりについてであった。若き日の砂川さんが、ヤマトで目にした光景というのは、河川敷にバラックをこしらえて、細々と生計を立てるウチナーンチュの姿であった。いわばそれは、沖縄人が日本社会で置かれる立場を端的にあらわすものであったともいえる。彼らがもっぱら受け持ったのは、社会を下層で支える役割であった。もちろんそれは好きで選んだ生き方ではなく、そうやって生きていかざるをえない現実があったのである。

明治以降の日本人は、西欧を模範にした国家建設に邁進してきた。その過程で、本来対等な関係を築くべき近隣の人びとに対して、いつしかきわめて傲慢な態度で接するようになった。日本人の周囲に向けるまなざしが、確実に変容していったのである。それが結果的に、河原暮らしを余儀なくされる人たちを生むことにつながってくる。

敗戦を経て、日本はかつての軍国主義から訣別し、形の上では恒久平和を希求する国に変わったといえる。ただ近年の中国や韓国との関係を見る限り、はたして本質的なところにどれだけ変化があったのかが疑わしくなってくる。また、米軍基地をめぐる沖縄住民の憤懣が、限界に近づきつつあるのをみても、日本と周辺地域との関係には、根本的なところに重大な齟齬が生じてい

るのではないかという思いを禁じえないのである。

こうした混迷の原点を突き詰めていくと、近代日本が暴力的に肥大化していこうとする時代にあつかる。そこで本稿では、砂川さんの記憶を糸口に、当時の社会状況を振り返りながら、今にいたる不信の背景にはいったいどのような問題が横たわっているのかについて、検討を加えてみることにしたい。

2 河原で暮らす民

砂川幸一さんは、1922年（大正11）に宮古島で生まれた。高等小学校を出てすぐに、旧制宮古中学校で給仕として勤めることになったが、まもなくして宮古上布を扱う地元の呉服店に転職した。

あるとき店で働いていると、女性客が話しかけてきた。彼女の知り合いが大阪で商売をしており、よい給料がもらえるので働きに行かないかと誘われたのであった。そこは宮古島の出身者が経営しているのだという。砂川さんからすると、大阪のような都会は映画でしか見たことのない憧れの対象だった。自分がそんなところで働くと考えただけで、思わず舞い上がってしまったという。

この話を店の主人に打ち明けると、「そんなうまい話があるわけがない。きっと騙されているから行くな」と諭される。しかし、都会への憧れを簡単には絶ちがたく、砂川さんは1938年（昭和13）の夏、その女性について大阪へ向かうことにするのである。

宮古島から那覇、さらに神戸までの船旅だった。神戸から阪神急行電車（現在の阪急）に乗った。ちょうどそのころ、阪神間では大洪水が発生した後だったらしく、車窓から見る光景は非常に荒れていた。鉄橋が流されていたところもあり、川の手前でいったん降ろされ、対岸に渡ってから再び電車に乗りなおしたりもしたという。

たしかに砂川さんの記憶どおり、この年の7月5日に神戸市周辺を襲った豪雨は、「阪神大洪水」と呼ばれる災害をもたらした。六甲山の多くの場所で山崩れや土石流が発生し、神戸や芦屋の市街地を直撃したのである。これにより多数の家屋が全半壊し、死者や行方不明者の数は753人にのぼった¹⁾。

砂川さんが降りたのは、宝塚の仁川駅であった。大阪に行くはずなのに、ずいぶん手前であるが、そんな地理感覚などあるはずもない。連れて行かれた先は、武庫川の河川敷にある「寄せ屋」（廃品回収業）だった。見たところ、トタンを張り合わせただけの、粗末な掘っ立て小屋である。ここで、家族みんなが暮らしていた。近くには朝鮮人の集落があった。砂川さんはスク

1) 神戸新聞出版センター編『兵庫県大百科事典（下巻）』1983年，p. 311。

谷崎潤一郎『細雪（中巻）』新潮社，1955年参照。

当時、神戸市東灘区に住んでいた谷崎潤一郎は、阪神大洪水に罹災しているが、土石流の凄まじさについては、「細雪」のなかでも詳しく記されている。

ラップの選別作業をさせられたが、あまりに思い描いていた仕事とかけ離れていたのが嫌になり、まもなく着のみ着のまま逃げだしたのであった。

若かりし頃の砂川さんが見たこの光景には、一つの背景があった。沖縄人の移住先としては関西方面が多かったのだが、やはり特定の地域に集住する傾向が見られた。大阪の大正区を筆頭に、その周辺では尼崎市や宝塚市という所が代表的な地域である。宝塚では、武庫川沿いにある高松町や美幸町が特に多かった。

どうして武庫川の河川敷に、朝鮮人や沖縄出身者が暮らしていたのだろうか。それは、1920年から28年にかけて行われた武庫川の改修工事に、多数の朝鮮人や沖縄人が従事したことによる。

宝塚市史第三巻によると、「太多田川や逆瀬川・支多々川から流入する山の砂が堆積して武庫川は、河床が高くなり、逆瀬川の合流点付近から、東海道線鉄道橋までの間は、水量が増大した時、河水が護岸を破壊し堤防を破り、沿岸の村落は水害を受けることがしばしばあった。とりわけ仁川合流点までは、河水が東西に氾濫して河幅もひろがり、流路が乱れて一定せず、堤防を完全に築くこともできない状態であった」と記されている²⁾。こうしたことから、武庫川の治水対策は長年の懸案となっていたのである。

改修工事への従事者は、延べ人数で100万人を超えるという試算もあり、非常に大がかりなものであったことがわかる³⁾。なかでも朝鮮人の労働者は、約30パーセントを占めたといわれ、それと同様に沖縄人の従事者もかなりの数にのぼった⁴⁾。

当時行なわれた工事の様子を詳細に記録した「武庫川改修工事概要」には、次のように書かれている。

「本工事ノ内主要ナルモノハ土工ニシテ失業者救済ノ目的ヲ以テ其ノ掘削ハ全部人力ヲ使用シ、運搬ハ一合積土運車及畚ヲ用ヒ一部ノ土運車ニ電力ヲ補助シタル外専ラ人力ニ依レリ」⁵⁾。

ここにあるように、武庫川の工事は「失業者救済」という美名のもと、そのほとんどを人力に頼るものであったらしく、彼らは朝早くから日暮れまできわめて危険な重労働に従事させられた。さすがにそうした功績を無視することはできなかったのか、朝鮮総督府政務総監の有吉忠一(1919～22年の兵庫県知事)は、「この工事は鮮人の力で出来上がったといっても過言ではない」と第一期工事の竣工式で述べたという⁶⁾。

工事は下流から始まり、そこから順に上流へと移っていった。最後となった第4工区は、工事詰所が逆瀬川合流点の南側にあったことから、そのあたりには「よんこば(四工場)」という通称が残った。工事が終了したあとも、彼らは砂利の採取や養豚などで生計を立てながら、武庫川

2) 宝塚市史編集専門委員編『宝塚市史 第三巻』1977年, p. 322。

3) 鄭鴻永『歌劇の町のもうひとつの歴史 宝塚と朝鮮人』神戸学生・青年センター出版部, 1997年, p. 54。

4) 同上書, p. 55。

5) 兵庫県編『武庫川改修工事概要』1927年, p. 8。

6) 鄭, 前掲書, p. 49。

の河川敷に住み続けざるをえなかった⁷⁾。砂川さんが川辺で見たのは、工事が終わって数年たった沖縄人集落の光景だったのである。

宝塚というと歌劇団や高級住宅地の華やかなイメージが思い浮かぶが、武庫川沿いを歩いてみると、まったく違う側面があることがわかる。工業地帯としての顔である。

ちょうど砂川さんが来た1938年（昭和13）から、二つの軍需工場が宝塚に進出する⁸⁾。ひとつは、「よんこば」のただ中に建設された東洋ベアリング株式会社（現 NTN 株）である。東洋ベアリングは陸海軍共同管理工場の指定を受けた会社で、日本における航空機用ベアリングの7割を生産していた⁹⁾。いまは NTN 武庫川工場の隣に宝塚市役所がならび、地名は東洋ベアリングにちなんで東洋町になっている。

もうひとつは1940年（昭和15）、海軍の斡旋により用地を買収し、36万坪にのぼる広大な敷地に工場を建設した川西航空機株式会社（現新明和工業株）である。この会社は、戦闘機「紫電改」を製造していたことで知られている¹⁰⁾。

現在「よんこば」に通じる道路沿いには、新明和工業の大きな工場がある。隣地に阪神競馬場ができていますが、戦時中はそのすべての敷地を川西航空機宝塚製作所が占めていた。当時ここでは、飛行機の噴射ポンプなどを製造していた。宝塚や西宮などには、川西関連の工場や施設がいくつも立地していたことから、米軍による攻撃目標となり、宝塚工場も1945年7月24日の空襲で壊滅した。なおこの地にも、新明和町という会社由来の名称がつけられている。

川西航空機に題材をとった城山三郎の小説「零からの栄光」には、戦時期における社内のようすが詳しく描写されている。戦争末期の1945年3月頃になると、川西航空機で働く者の数は、徴用工や動員学徒をふくめて7万人を超していたという¹¹⁾。このなかには徴用された多数の沖縄人や台湾人が含まれている¹²⁾。また朝鮮人労働者の数は、2000人以上にのぼったともいわれ、敗戦時には彼らが工場で「戦勝祝賀会」を開いたということもあった¹³⁾。

こうして宝塚では、まるで沖縄人や朝鮮人の暮らす河原近くに引き寄せられるようにして、軍

7) 沖縄県人会兵庫本部35年史編集委員会編『ここに榕樹あり 沖縄県人会兵庫本部35年史』1982年、pp. 58～64。

先述のとおり、改修以前の武庫川（仁川合流点以北）は、度重なる氾濫で川幅が東西に広がっていたが、制水堤を設けて流路の統一をはかり、既設の堤防を整備したことにより、水の流れを遮断した堤の外側には廃川敷地が生まれた。そこに、朝鮮人や沖縄人は暮らし始めたのであった。本稿では、こうした土地を便宜的に「河川敷」と表現している。ちなみに、第一期工事（現 JR 東海道線鉄橋付近～河口）で生じた廃川敷地には、甲子園球場が建設された。

8) 宝塚市史編集専門委員編、前掲書、pp. 424～426。

9) ダイヤモンド社編『産業フロンティア物語ベアリング〈東洋ベアリング〉』ダイヤモンド社、1967年、pp. 71～72。

10) 宝塚市史編集専門委員編、前掲書、p. 471。

11) 城山三郎『零からの栄光』角川書店、1981年、p. 20。

12) 同上書、p. 93。

新明和工業株式会社社史編集委員会編『社史1』新明和工業株式会社、1979年、p. 64。国民徴用令（1939年）が最初に適用されるのは、川西航空機の従業員に対してである。

13) 同上書、p. 110。

需工場が建設されたのであった。これらの状況を見ていると、働き口を求めて本土にきた沖縄人の生活は、植民地化されやむなく故郷を離れた朝鮮人たちの境遇と、その多くが重なりあっていたことがわかる。そして両者はまるで日本人の視界からすっぱり抜け落ちるかのようにして、河原で暮らしていたのであった¹⁴⁾。

関西圏に住む沖縄出身者および2, 3世の数は、他地域と比較するときわめて多数にのぼる。とりわけ大阪市大正区には沖縄出身者が多いのだが、ここでもかつて宝塚と共通する居住環境に関わる問題が生じていた。

現在大正区の人口は約7万4千人であるが、そのおよそ4分の1が沖縄出身者やその子、孫だと言われている。この数字を見るだけでも、大阪に移住した人の多さが分かる。こうした人の流れは、1920年頃に始まったといわれる。当時の沖縄経済は、ソテツ地獄（ソテツの実を食べて飢えをしのいだ）と形容されるほどの疲弊状態にあり、その影響で多くの人びとが県外に流出することになる¹⁵⁾。とりわけ工業化が進む大阪には、沖縄との航路が開設されていたこともあり、職を求める人たちが集中する形になったのである。

なかでも大正区には、鉄関係の事業所や材木屋が多かったことから、港で荷降ろしをしたり、材木を担ぐ仕事に多くの沖縄人が従事していた。そうしたところから、鉄くずや薪を商売にする人が数多く出てくる。また大正区は近代紡績の発祥地で、大阪紡績の工場が立地していたことから、そこで女工として働く沖縄の女性もたくさんいた。しかしながら、なかには「朝鮮人、琉球人お断り」の札をかけて、露骨な差別をおこなう工場も見られた¹⁶⁾。

大正区では、沖縄の人たちがクブングワー（くぼ地）と呼んだ大正運河沿いの低湿地帯に、材木の端材を持ち寄り、水上住宅のようなバラックを建てて生活した。親類が大阪に出てくれば、皆で力を合わせて家を建ててやったというから、悲惨な状況下にあっても、助け合い精神をもとにする前向きなバイタリティーがあちこちで見られたのである。こうした建物の数は、数百軒に上ったといわれる¹⁷⁾。

クブングワーの住環境は、雨が降るとすぐに浸水するなど問題が多く、また狭い通路を挟んで住宅が密集しているため、ひとたび火災が発生すればどうすることも出来なかった。この集落を、周囲は「沖縄スラム」と呼んだ。やがて行政はクブングワーを、不良住宅地域だとして立ち退きを求め、その後彼らの多くが大正区平尾に移ったのであった¹⁸⁾。

14) 上田雅一編『宝塚蜻蛉工場私記』ウエダ映像社、1986年、p. 277。

敗戦時まで川西航空機宝塚工場で勤めていた上田氏は、武庫川沿いに多数建てられた川西の社宅で暮らしていたという。自宅のすぐそばには、実際に朝鮮人のバラックがあり、断水の時など彼らが使っていた井戸水を、汲ませてもらったことがあると証言している。また沖縄県人会兵庫県本部の新里吉光副会長によると、戦後川西航空機の社宅は借家として使われ、多くの沖縄出身者が川西（新明和）に家賃を払って入居していたという。その後、入居者は土地建物を会社から買い取った。

15) 沖縄大百科事典刊行事務局編『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社、1983年、p. 630。

16) 太田順一『大阪ウチナアンチュ』ブレーンセンター、1996年、p. 92。

17) 太田、同上書、p. 89。

18) 崎浜盛喜「クブングワー立ち退き問題」『ヤマトウのなかの沖縄』大阪人権博物館、2000年、p. 85。

こうしてきてきたように、ヤマトに移住した沖縄出身者の多くが、いまでいう 3K 労働に従事しながら、懸命に日々の暮らしをうちたてていたのである。その日常は、日本経済を縁の下で支える姿そのものであった。

しかし、彼らに注がれた日本人の視線は、けっして温かいものではなかった。沖縄人が低賃金の現業労働に就き、ひどい住宅で生活せざるをえない構造があったにもかかわらず、それを理解しようとするヤマトンチュ（日本人）は少なかったのである。またそれは、植民地からきた朝鮮人に対する処遇とどこかで通じあっていたのだった。

3 内国勸業博覧会と人類館

大正区で育った知人は、運動会になるとあちこちで指笛が響いて賑やかだったと回想する。ここでは、そんな「違い」との出会いがたくさんある。文化的背景の異なるもの同士が、お互いを認め尊重しあうことが、豊かな社会づくりの第一歩となる。いっぽうそのような違いが地域社会における、さまざまな摩擦の引き金になることも少なくない。とりわけ食文化は身体に密着しているものだけに、それを他者から揶揄されると非常に困った事態に陥る。

沖縄出身者の子弟が「おまえら豚の足食ってるやろ」と、学校で陰湿ないじめの標的になることもあったという¹⁹⁾。子どもたちのこうした世界は、大人社会をそのまま投影しているかのようでもあった。豚足はフランスやドイツでもごく普通に使われる食材である。しかし、多くの日本人はフランス人が豚足を食べているのをみても、同様の反応を示すことはないと思う。卑屈な笑みを浮かべて、フランスの伝統的な食文化に敬意を表すか、違和を持っても見てみぬふりをする人が多数であるに違いない。

差別者のもっとも卑劣なところは、絶対的に優位な高みから、相手を愚弄してやろうとするその態度である。それがどんなに根拠薄弱な理由であっても、偏見という強力なプレス機は、相手のプライドを容赦なく押しつぶそうとする。日本社会の中には、マイノリティーがどれだけ努力をしても、まったく報われぬような分厚い壁が立ちはだかっていたのであった。

差別される側にとってみると、理不尽極まりないことなのであるから、そうした日常が続けば、やがて精神は荒んでいくに違いない。本土に住む沖縄人の中には、酒にはけ口を求めることでしか日ごろの鬱憤を晴らすすべを持たず、次第に家庭生活が立ち行かなくなるケースもけっして少なくはなかった。

いまから約100年まえのことである。武庫川の改修が、具体化しようとしている頃であった。1903年（明治36）3月から7月までのあいだ、大阪の天王寺を会場として第5回内国勸業博覧会が開催された。第1回から3回までは東京、第4回は京都で行われ、最後となった5回目の博覧会は、面積や出品者数などあらゆる面において、これまでで最大規模のものとなった²⁰⁾。

19) 太田, 前掲書, p. 44。

20) 吉見俊哉『博覧会の政治学』中央公論社, 1992年, p. 127。

内国勸業博覧会は殖産興業政策の一環として行われたもので、冷蔵庫や扇風機それにアイスクリームのようなものまで、数多くの物品が日本ではじめてこの博覧会で紹介された。明治天皇もここに足を運んでいる²¹⁾。天王寺周辺を会場にした理由には、大阪南部の開発に弾みをつけようという思惑があったからだとされる。現在の同地域には、博覧会から引き継がれた美術館や捕虜収容所を経て再生した公園、さらに明治末に開業した新世界ルナパークのシンボルである通天閣（いまは二代目）が残っているところをみても、当時の狙いがある程度実現しているといえるのかもしれない²²⁾。

さてこの内国勸業博覧会には、学術人類館という一見学問的な趣のする展示スペースがつくられた。「異民族、異文化を知る」と称してはいたが、その内実は学問とはかけ離れたものだった。当時の新聞記事によると、「内地に近き異人種を聚め其風俗、器具、生活の模様等を実地示さんとの趣向にて北海道アイヌ五名、台湾生蕃四名、琉球二名、朝鮮二名、支那三名、印度三名、爪哇一名、バルガリー一名、都合二十一名の男女が各其国の住所に模したる一定の区画内に団欒しつつ、日常に起居動作を見するにあり」²³⁾という、まるで人を動物のようにして「展示」する見世物小屋だったのである。

このような展示には、悪しきお手本があった。1851年、史上初めての万国博覧会がロンドンで開催される。これ以降、欧米各地で頻繁に万国博覧会が開催されることになるのだが、そこには帝国主義のディスプレイ装置ともいえる要素が多分に含まれていた。とりわけ1889年のパリ万博では、そうした方向性がより一層顕著となり、世界各地のフランス植民地から連れてきた人々を、柵のなかで展示するという「人間動物園」がここに登場することとなる。博覧会の時代は、帝国主義が暴力的に肥大化していく姿と重なりあっていたのだった。「未開人」を見世物にするという発想は、19世紀末の社会進化論や人種差別主義という時代の思潮を背景にするものであった。いわば明治期の日本人は、こうした西洋列強の植民地主義を忠実に模倣していたのである²⁴⁾。

展示に際しては、坪井正五郎を中心とする東京帝国大学人類学教室が、積極的に協力をしたということからも、当初の人類学が植民地主義と密接なかわりをもつ学問領域だったことをよく示している²⁵⁾。

しかし、生身の人間を「展示」していることに対して、さすがに清国や朝鮮からも強い非難の声があがる。清国の非難に対しては、当初「人類館」としていた名称を「学術人類館」に改めることで、対処しようとした。見世物ではなく「学問」であることを強調したのである。また開館から一ヶ月も経たぬ三月末までに、「朝鮮人」の展示を中止した。そして「琉球新報」では「人類館」に抗議する記事が数度にわたり掲載され、それが「大阪朝日新聞」にもそのまま紹介されるなどしたことで、展示に対する抵抗感が拡がりはじめた。そうした動きを受けて、結局二ヶ月

21) 平井正治『無縁声声』藤原書店、1997年、p. 38。

22) 新修大阪市史編纂委員会編『新修大阪市史』大阪市、1994年、pp. 34～48。

23) 大阪朝日新聞、1903年3月1日。

24) 吉見、前掲書、pp. 180～187。

25) 松田京子『帝国の視線』吉川弘文館、2003年、p. 137。

ほどで「琉球人」の展示が取り止めとなり、「学術人類館」に対する抗議は一応終結する²⁶⁾。

しかし、いずれにせよ「人類館」事件は、当時の日本人がどのような態度で、その周辺の人たちに接しようとしていたのかを非常によく表しているのである。もちろん西洋人の「未開」にむけるまなざしから、日本人だけが埒外であるはずもなかったが、その視線を反転させるようにして、「文明国」の高みからアジアを見下そうとするようになるのである。こうした時代をいわば代表する意見が、1885年に書かれた福沢諭吉の「脱亜論」である。最後の部分を引用してみよう。

「わが国は隣国の開明を待つて共にアジアを興すの猶予あるべからず、むしろその伍を脱して西洋の文明国と進退を共にし、その支那朝鮮に接するの法も隣国なるが故にとて特別の会釈に及ばず、正に西洋人がこれに接するの風に従って処分すべきのみ。悪友を親しむ者は共に悪名を免れるべからず。われは心においてアジア東方の悪友を謝絶するものなり」²⁷⁾。

なんとも激的なアジェンションであるが、竹内好は福沢諭吉を「文明一元観の最大のイデオログ」だと評している。もう少し詳しく竹内の説明を引いてみる。

「明治維新から日清戦争までの国家建設の時期に、この運動を推進したエリートたちをとらえていた世界観、また、その実現として教育手段によって漸次国民の各層に拡大していった国際感覚は、一言にしてつくすならば、文明一元観に基礎をおくものであったと要約することができるように思う。さまざまな思想の対立と争いがあり、その起伏消長があったが、全体としてそれは、文明一元観に集約される方向に動いていたのである。そして日清戦争の勝利が、この方向を決定的なものにした。

文明一元観というのは、歴史は未開から文明への一方交通だという歴史観を軸にして世界を解釈する思想のことである。（中略）

彼の事業は、明治国家の思想に筋金を通しただけでなく、その後の日本人の精神形成を大きく規制したと思われる。彼が日清戦争を、文明の野蛮への挑戦と見、その勝利に随喜したことはよく知られている。日本民族が蚕食を免れて独立国として生きのびるために、文明の採用が不可欠であることを率先主張し、そのための改革に全身全霊を傾けてきた彼であるから、理論の実証を目のあたり見たときの彼の喜びは当然であった」²⁸⁾。

文明一元観は、西欧近代の思想に特徴的な考え方であり、「資本論」が帝国大学において翻訳、紹介されはじめて以降、やがて日本の知識人を右往左往させることになるマルクス主義にも色濃く反映されている²⁹⁾。ダーウィニズム以来の近代の学問は、自然を開発し生産力を発展させることが、社会を「進歩」させる原動力だという強い確信があった。そして人類が進歩していくその過程のなかに、歴史の基本法則を見出そうとしてきたのである³⁰⁾。

26) 松田、前掲書、p. 123。

27) 福沢諭吉「脱亜論」『福沢諭吉著作集第8巻』慶應義塾大学出版会、2003年、pp. 261～265。

28) 竹内好『日本とアジア』筑摩書房、1993年、pp. 260～261。

29) 中村尚司「循環と多様から関係へ」エントロピー学会編『循環型社会を問う』藤原書店、2001年、pp. 233～235。

30) 網野善彦『「日本」とは何か』講談社、2000年、p. 13。

こうした単線的な発展図式を根拠に、福沢をはじめとする近代日本の知的エリートは、「アジアの悪友たちとは縁を切り、西欧社会を模範とする」社会を作り出すことに邁進したのであった。内国勸業博覧会における「人類館」は、いわばその時代精神を体現するものであった。それは「文明国」日本が、あの破滅的な戦争に足を踏み入れ、やがて玉砕していくその入り口の姿にも見えるのである。

先の戦争のことを、一般に「15年戦争」と呼んでいる。しかし、田中宏は「50年戦争史観」にたつ必要性を指摘して、次のような文章を書いている。

「50年前、日本が「ポツダム宣言」を受諾したことによって、第二次大戦は終結した。しかし、それがどこまでさかのぼったかについては、意外と看過されているのではなかろうか。同宣言が引用する『カイロ宣言』は、『満州、台湾、澎湖島』などを中国に返還すること、『朝鮮の人民の奴隷状態に留意し、やがて朝鮮を自由独立のものにする』とある。

従って、宣言を素直に読むと、戦後の原点は、台湾、朝鮮などの領有にまでさかのぼって、それが否定されたことなのである。戦後も一般的には『15年戦争』といわれるが、それでは、『満洲国』は消滅するが、台湾、朝鮮、南カラフト、南洋群島などは、戦後も依然として、日本の統治下に残っていなければならないことになる。

歴史認識について、日本にはいろんな意見があるが、しかし、15年戦争以前の台湾、朝鮮などを放棄させられたのは、連合国が戦勝の勢いのもとで行なったもので、『不当である』という話は聞いたことがない。すべての人が、50年前にそれを受け入れたことから、日本の戦後が始まったのではなかろうか³¹⁾。

この文章は、戦後50年の節目に書かれたものである。それから10年たった今年（2005年）は、ちょうど戦後60年目にあたる。わたしたちは、ただ漠然と先の戦争が終わって60年たったと捉えているが、それがいつ始まったのかについては、あまりよく考えてこなかった。しかし、「ポツダム宣言」の内容を検討してみると、日本は「15年間」だけの責任を問われたわけではなく、日清戦争以降の「50年間」にわたる侵略行為の清算に同意していたということなのである。そこから考えると「人類館」は、まさに戦時下の事件であったと言えそうである。

明治以降の日本人は、侵略と戦争に明け暮れてきた。もちろんそこには、西洋列強によるアジア侵略を目の当たりにしたことで、日本に強い危機意識が芽生えたことが背景にある。だが、そうしたところから、直ちに覇権主義に目覚め、自ら実力行使に打って出るというのも、どこか極端にうつる。ここに先立つ時代には、日本が膨張していくその前提となるような動きはなかったのだろうか。そこで、いまいちど歴史の針を戻し、15世紀ごろからの日本と周辺諸地域との関係を俯瞰してみることにする。

31) 田中宏「1894年から半世紀」『中国語』内山書店、1996年1月号、p. 1。

4 日本帝国の予兆

朝鮮の李朝実録のなかに、『成宗実録』という記録が残されている。ここに収録された「金非衣等の漂流記」には、興味深い話が収録されている。1477年2月、済州島を出航した漁民たちが暴風に遭い、漂流しているところを救助され、与那国島に上陸することになる。彼らは与那国島に6ヶ月滞在したあと、島づたいに沖縄本島まで送られたすえに朝鮮に戻っていく。結果的に1年半もの間、琉球の生活文化を見聞したのであるが、彼らの語る南島の風俗が奇異なことから、史官が彼らから聞き取り記録に残したのである。

この「漂流記」については伊波普猷が、「十五世紀末の南島」のなかで詳述しているのだが、ここには当時の琉球が日本をどのように見ていたのかがわかる、興味深い話が残っているのである。

「朝鮮人が沖縄本島に来てから、はや三か月も経過したので、彼等は通事を介して母国に還して貰いたいと願い出た。通事が早速これを国王に取次いだら、国王は、日本人性悪、不可保、お前等を江南の方からかえしてやろうと思っている、といったということである。四百五十年前から、琉球人が日本人をよく思っていなかったことが、これでよくわかる。（中略）また謝傑や夏子陽の使録にも、日本人が数百人群集して、冊封使の船の入港を待って交易したことや、利刀を擁して、琉球人の心胆を寒からしめたといったようなことが見えている。いずれも日本人の勢力が南漸して、琉球の独立が危うくなることを予想させる現象である」³²⁾。

伊波はこの記述を、のちに薩摩によっておこなわれる、琉球に対する侵略行為を予感させるものとして捉えている。果たしてこれがダイレクトに薩摩の琉球侵略に繋がってくるものかはわからぬが、この当時ヤマトが琉球やその他周辺地域に警戒感を抱かせる乱暴な振る舞いをしていたことは、事実であるのかもしれない。

ただこの時代は、明の海禁政策に抵抗する「倭寇」の動きが活発になってきており、琉球王も相当手を焼いていたことから、「倭寇」に対する不快感を表しているという解釈もできる。当時の「倭寇」は、中国南部の海辺の中国人や、壱岐、対馬から九州全域、さらに和泉や紀州の商人までをふくむ巨大なネットワークになっていたのである³³⁾。

応仁の乱の後、日本では各地で下克上の動きが顕著になり、以後長期にわたる戦国の争乱が続く。やがて16世紀後半になると、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康といった強力な指導者の登場で、日本は再び統一にむかう。1603年（慶長8）、戦乱を勝ち抜いた徳川家康は征夷大將軍となり、江戸幕府をひらいた。そして彼は、着々と支配体制の基盤づくりを推し進めていくのであった。

1609年（慶長14）、家康は島津氏に琉球への出兵を認め、三千もの薩摩軍が琉球に侵攻する。

32) 伊波普猷「15世紀末の南島」『をなり神の島』平凡社、1973年、p. 108。

33) 網野善彦『日本社会の歴史（下）』岩波書店、1997年、p. 76。

薩摩軍によって捕虜となった尚寧王は、駿府城で家康に謁見した後、江戸城で二代将軍秀忠に面会して鹿児島に戻り、薩摩の琉球統治に従うことを誓約した³⁴⁾。

同じころ、家康が松前氏に蝦夷地の支配権を認めたことを考え合わせてみると、この時代は近世日本がその勢力をアイヌ世界と琉球王国にまで拡張していく、ちょうどそんな時期であったことがわかるのである。ただ、松前氏の支配する地域は北海道南部に限定され、それ以外の広い範囲はまだアイヌの秩序下にあった。同時にここで重要なことは、薩摩が琉球を征服したことで、琉球を窓口とする中国との貿易関係が開かれたことであった。

またいっぽうで徳川幕府は、朝鮮との外交や貿易の関係回復に努め、1607年にまず最初の使節団が朝鮮から訪れた。16世紀末、豊臣秀吉がおこなった壬申・丁酉の倭乱（文禄・慶長の役）によって、数多くの朝鮮民衆が殺害されたり、日本に連行されたりするなどしたが、このあと当然のことながら朝鮮人の日本に対する感情は冷え切っていた。このような日朝関係を懸命に修復しようと尽力したのが、藩の財政を朝鮮貿易に大きく依存する対馬藩であった³⁵⁾。

隣国と仲良くしたいという気持ちが幕府にあったことはもちろんだろうが、それ以外にも、貿易振興や情報収集など、さまざまな利害をめぐる思惑が働いた。それは朝鮮側にも同様のことが言えた。またこの最初の使節には、倭乱により日本に連行され捕虜となった人たちを、朝鮮に連れ戻す目的もあった。実際に使節団の一行は、捕虜となっていた1418名を故国に連れ帰ったのである³⁶⁾。

そして最初の来訪から2年後の1609年、朝鮮と日本の間に己酉約条（通商条約）が結ばれる。ここには、年に20隻の貿易船を派遣するという条項も含まれていた。第4回目となる1636年の訪問以降、この使節団を朝鮮通信使と呼ぶようになる。結局1607年から1811年までの間、朝鮮通信使の来訪は12回を数え、両国の間には善隣友好の外交が展開することになった³⁷⁾。

17世紀の後半にさしかかると、各地の諸大名から送られる年貢米の輸送が活発になり、それにながらざる商人の活躍も目覚ましいものがあつた。自然環境が激変するほどの、新田開発がおこなわれるのもこのころである。

幕府の命を受けた河村瑞賢は、陸奥荒浜から江戸に年貢米を運ぶために太平洋航路（東廻り）を整備する。だが東廻航路は江戸に至る距離としては短かったが、登り荷として運ぶ米の量は多い反面、下り荷が少なく、その上危険であったことからあまり発展しなかった。

さらに瑞賢は、大坂と出羽を結ぶ日本海航路（西廻り）を拓く。近江や能登の商人たちは、すでに蝦夷地においてアイヌ人との交易を請負いはじめており、蝦夷地と敦賀、若狭を結ぶ荷所船を運航させていた。北国からの年貢米を運ぶ幕藩の輸送船と、民間の荷所船とは本来性格の異なるものであったが、西廻航路の整備が進んだことと、航海が比較的安全であったことから両者は

34) 高良倉吉「琉球の形成と環シナ海世界」『周縁から見た中世日本』講談社、2001年、pp. 258～259。

35) 上田正昭「朝鮮通信使の歴史的意義」『朝鮮通信使』明石書店、1995年、p. 27。

36) 『江戸時代に隣の国から来た朝鮮通信使』ネットワーク朝鮮通信使展、1994年、p. 53。

37) 上田正昭、前掲書、p. 19。

結合していくのである。おそくとも18世紀初頭には、蝦夷地と大坂をむすぶ北前船が出現したものと考えられている。こうして西廻航路（北前航路）は、さながら日本の大動脈となっていくのである³⁸⁾。

西日本では棉、菜種、藍などの生産が盛んにおこなわれるようになるが、これらは大量の肥料を必要とする作物であった。そこで当初は鰯を原料とする魚肥が使われたが、さらに効きのよい鯨のメ粕が使われるようになる。それら農作物の生産量が拡大するのにともなって、北方から運ばれるメ粕に対する需要が急増してくるのである。

西廻航路の往来が活発になるとともに、蝦夷地から運ばれてくる物資の数が多くなる。鯨、干鮑、煎海鼠、昆布、棒鱈などである。その多くが、アイヌの生産によるものであった。

またアイヌは一般に、採取狩猟民だと思われるが、交易者としての側面のほうも実のところはかなり強かった。927年に成立した「延喜式」のなかに出てくる陸奥国の産物に、「[葦鹿皮、獨犴皮]とあるが、前者はアシカを指し、もう一つのほうはオットセイのようである³⁹⁾。こういうことからわかるように、東北地方には早い段階からアイヌの往来や生活拠点があったと見られる。

大塚和義によると、おそらく17世紀から18世紀における、アイヌの行動範囲は、本州北部の津軽・下北両半島など南に向かうとともに、北方に対しては現在の北海道全域を中心に、クリール（千島）列島およびサハリン（樺太）南部部一帯、さらにカムチャツカ半島の先端、大陸のアムール川流域にまで居住や行動の痕跡を残しているという⁴⁰⁾。

アイヌはかなり古くから、そうした行動力を背景に山丹と呼ばれた古アジア族やツングース系の人たちと交渉し、通称蝦夷錦と呼ばれる華人の織物や玉などを持ち帰り、それに鷹の羽、鹿、熊の皮、漁獲物を加えて東北北部に運んで物々交換をしていた⁴¹⁾。

さてここからである。17世紀の初頭に、松前藩が蝦夷地の支配権を認められたと先述した。このころから和人の蝦夷地における勢力圏が拡大していくのと軌を一にして、アイヌの生活空間は一方的に奪われていくのであった。アイヌにとってみると、いわば自らが作り上げてきた精神世界までもが、破壊されていく事態を意味するものであった。

こうした時代の変遷に、ある産物を重ねてみる。蝦夷地特産の昆布である。昆布は太平洋沿岸の、親潮寒流が洗う側に育つ。対馬暖流が流れる西側のほうには、昆布はあまり育たない。だから、現行の昆布産地を見ても、渡島半島の松前を基点にして考えると、それより東側に分布している。

以下は大石圭一が著した「昆布の道」を参考にする。大石によると、「昆布史」は蝦夷地の開拓、いわば和人の勢力拡大と大いに関係しているのだという。和人が最初に住んだのは、松前のように北海道の南端といえる場所であった。そこから東の函館、北の噴火湾（内浦湾）へ、さら

38) 牧野隆信『北前船の時代』教育社、1979年、pp. 40～46。

39) 大塚和義『アイヌ海辺と水辺の民』新宿書房、1995年、p. 13。

40) 大塚、同上書、p. 22。

41) 鶴見良行『ナマコの眼』筑摩書房、1990年、p. 419。

に東の日高、北の釧路そして東のエトロフという具合に、和人が勢力圏を広げていくのに伴って、日本の食文化には新しい種類の昆布が加わっていったのである。

「昆布の道」では、昆布の種類に照応させて、時代を5つに区分している⁴²⁾。

- ① 7世紀半ばから13世紀前半は、細布（細目）昆布の時代である。この昆布は渡島半島の矢越岬辺りから以西の暖流域に育つもので、古い時代にはダシとしての利用が主だったようである。このころの昆布食は、まだ北海道から東北日本海側の新潟あたりまでという、限定的な範囲での広がりであった。797年に成立した「続日本紀」の霊亀元年（715年）の記述に、蝦夷の須賀君古麻比留らがやってきて、昆布を献上したと出てくる。「昆布」ということばが相当古いということがわかる。また「延喜式」（927年）には、陸奥からの献上品として現れている。当時、昆布のことは「ヒロメ」というような和名で呼ばれていた。

- ② 細目昆布につづいて、13世紀以降から江戸の初期17世紀前半は、宇賀昆布と呼ばれる真昆布の時代である。宇賀とは函館付近の旧名を指し、そこで取れる昆布は葉の形や品質に特徴があることから宇賀型と呼ばれた。玄恵が著したといわれる14世紀の「庭訓往来」では、「四月状返」のなかに「宇賀昆布」が紹介されている。また同じく玄恵が作者とされる能狂言「昆布売り」によると、相当量の昆布が若狭の小浜から京都に運ばれていたらしい。日本海を通り運ばれた昆布は、その寄港地において広く利用された。現在における消費量もその伝統に重なり、敦賀などにおいては、いまもなお昆布の加工が盛んである⁴³⁾。

1457年には、宇賀昆布の中心地である渡島半島でコシャマインの乱が起こっている。津軽から渡島半島に移った安東氏は、アイヌとのあいだに抗争と共存をくり返しなが、一個の強力な政治勢力となっていた⁴⁴⁾。だが、和人の膨張は先住民との抜き差しならぬ緊張状態を生み出し、ついにはコシャマインが挙兵することになるのである。その結果、安東氏の砦はほとんどが陥落するのであるが、のちに松前藩の藩祖となる武田信広の反撃によって、結局アイヌ側は敗退してしまうのであった。コシャマインを討った武田信広は、その功により蠣崎季繁の嗣子となった。その後も、数度にわたるアイヌの蜂起があったが、蠣崎氏は巧みに和睦と騙し討ちを繰り返すことで切り抜けていった⁴⁵⁾。

- ③ 江戸時代に入る17世紀から18世紀後半までは、元揃い型真昆布・三石昆布の時代である。

「元揃」というのは、葉の元を三日月形に切りそろえて、ミミ、赤葉などを取り除き、葉をきれいに伸ばして折り畳み束ねたものを指している⁴⁶⁾。

松前氏の支配地域が次第に東へ広がることで、日高地方の三石付近でとれる「三石」昆布が加わることになる。一般には日高昆布という名称のほうが馴染み深い。

42) 大石圭一『昆布の道』第一書房、1987年、pp. 101～111。

43) 大石、同上書、p. 108。

44) 網野、前掲書、p. 46。

45) 更科源蔵「解題 松浦武四郎と『近世蝦夷人物誌』」松浦武四郎『アイヌ人物誌』農山漁村文化協会、1981年、pp. 20～21。

46) 小倉屋山本創業百五十年記念誌『なにわの昆布の物語』1998年、p. 32。

勢力圏を広げつつある松前藩の行動は、アイヌの無欲さにつけ込みながら不平等な交易を迫るなど、狡猾さに加えて次第に威圧的なものになっていった。1669年、和人のそうした不当な支配に対して、シャクシャインらによる近世最大のアイヌ蜂起が発生することになる⁴⁷⁾。

先述したように、この時代になると西廻航路が整備され、北方の産物が大量に西日本に流入するようになる。若狭の小浜で考案されたおぼろなどの細工昆布が、元禄になって大坂にも伝わる。また佃煮などのさまざまな商品も生みだされ、加工技術は洗練の度を深めていくのである⁴⁸⁾。

さらに和人の勢力は、千島にまで拡大していく。場所請負人たちの目に余る横暴によって、アイヌ人の怒りはやがて頂点に達し、1789年国後島や目梨地方において、アイヌ最後の蜂起となる国後目梨の乱が発生する。しかし、松前藩はすぐさま武力を持って蜂起を鎮圧し、首謀者の首は松前城外にさらされた。結果的に、クナシリアイヌは絶滅させられたといわれる⁴⁹⁾。

蝦夷地はこのあと幕府の直轄となった。ここには、南下の兆しをみせるロシアに対して、幕府が蝦夷地すべてを日本の領土だと主張する必要にせまられたという背景があった。同時に対アイヌ政策も大きく変化することになり、懐柔・同化政策が前面に押し出されていくことになる。松前藩時代に横行していたアイヌに対する無理な収奪は禁じられ、交易基準を一定にするという改善がみられたのであった⁵⁰⁾。

ところが1821年になると、幕府は蝦夷地直轄を打ち切り、ふたたび松前氏に復領を許す。これ以降松前藩は、全領地を藩主の直轄とすることで、アイヌに対する一元的な支配を強め、以前にも増してきびしい搾取を強引にすすめていった。こうして、アイヌは過去最悪の受難の時代を迎えることとなった⁵¹⁾。

また1799年には、高田屋嘉兵衛がエトロフ航路を開いた。幕府直轄領時代における、嘉兵衛の大きな功績であった。これにより従来からある真昆布や日高昆布に、根室や千島列島で採れる長昆布が新たに加わるようになった。

④ 19世紀以降は長昆布時代である。この昆布はダシではなく、それ自体を食べる種類のものである。長昆布は中国に輸出される重要な産品であった。中国における昆布の需要は、食材としての利用はもちろんだが、それ以外にも重要な目的があった。広大な中国では、海から遠く離れた内陸部で生活する人たちも多い。そうした地域では、慢性的なヨード不足を原因とする甲状腺腫が非常に多く見られた。その治療薬としての昆布需要が相当大きく、とりわけ高田屋嘉兵衛がエトロフ航路を開き、長昆布が供給できるようになって以降、大量の昆布が中国に向けて輸出されるようになった。

北前船が運んだ昆布は、財政状況が逼迫していた薩摩藩にとりきわめて重要であった。薩摩藩はこの昆布を、琉球を通じて中国に向けて輸出する。琉球には18世紀末に「昆布座」が設置され、

47) 菊池勇夫「蝦夷島と北方世界」『日本の時代史19』吉川弘文館、2003年、p. 22。

48) 小倉屋山本、前掲書、p. 65。

49) 花崎阜平『静かな大地』岩波書店、1988年、pp. 181~185。

50) 同上書、p. 54。

51) 同上書、p. 55。

薩摩藩がここを拠点に昆布貿易を取り仕切るのである。このようにして薩摩藩は、古くから中国との進貢貿易の歴史がある琉球を、昆布の密貿易にうまく利用したというのが大石の意見である⁵²⁾。ふつう干鮑、煎海鼠、フカノヒレを俵物三品というが、ここに昆布をあわせた4品が主な輸出用の品物であった。重量換算でみると、平均して8割以上が昆布であった⁵³⁾。

一方中国からもたらされる物産は、粗薬剤、朝鮮人参などの薬品類を中心に、磁器、漆器、織物、象牙等多岐にわたった。薬品は富山の薬商人に売られた。薩摩藩と越中売薬「薩摩組」の利害はうまく結びついていたらしく、「薩摩組」の船が昆布を運んでいたという事実もある⁵⁴⁾。

琉球は15世紀以降、中国の冊封体制下にあり、いわば中華思想に基づく君臣関係を結んでいた。こうした中華的秩序は、琉球のみならず東アジアから東南アジアにいたるまで、広い範囲に及ぶものだった。進貢国の王侯が変わると、中国皇帝は使者を派遣して新しい王様を任命する。これを冊封といい、その使者を冊封使という。中国と周辺諸国との「進貢・冊封の関係」には、いま述べたような政治的側面と、中国側が進貢品を高価で買取り、領内での貿易を許可するという経済的側面があった。こうした関係は、明治初年まで続くのである⁵⁵⁾。

冊封体制を背景に行われた中国との昆布貿易は、琉球側にかなり有利な条件であったと考えられ、結果的に薩摩藩は莫大な利益を手にしたといわれる。大石はこの利益が、倒幕の原動力となったと推理している⁵⁶⁾。

さまざまな事情の末に、北方の昆布が大量に沖縄へもたらされることになった。蝦夷地のような寒冷地由来の昆布が、まったく収穫されない沖縄において大量に消費されることにつながってくるのである。人びとの交易が、北の昆布を南の食卓に結びつけていたのであった。クーブイリチー（昆布と豚肉の炒め煮）や汁物の具材に長昆布をたくさん使う沖縄の食生活は、歴史を学んではじめて理解することができる。

北前船が運航しない冬季の間、船は現在の大阪市大正区三軒家あたりの木津川口に係留された⁵⁷⁾。淡水にさらすことで船喰虫を防ぐ目的があった。大正区に多く住む沖縄人は、北前船とこのような縁でも結ばれていたのである。

これは、真昆布の産地として有名な、北海道茅部郡南茅部町の地場産業振興センターで聞いた話である。全国各地で昆布の物産展をやるが、関西方面や日本海側のかつて北前船が寄航した地域で開催すると、特に売り上げがよいのだということだった。日頃私たちは気づかないでいるが、

52) 大石、前掲書、p. 187。

53) 同上書、p. 216。

54) 読売新聞北陸支社編『日本海こんぶロード北前船』能登印刷出版部、1997年、p. 21。

鶴見、前掲書、第4部1章「俵物三品」参照。鎖国下の長崎交易は、いわば官営独占貿易といえるものであったが、禁制の網をくぐって流通する「抜荷」も多数存在した。薩摩藩はこの抜荷政策を積極的に推進していたらしく、北陸で良質の俵物を仕入れ、それを琉球を通じて売り捌いていたのである。また抜荷については、山脇悌二郎「抜け荷」日本経済新聞社、1965年参照。

55) 沖縄県立博物館編『冊封使』沖縄県立博物館友の会、1991年、p. 1。

56) 大石、前掲書、p. 233。

57) 読売新聞北陸支社、前掲書、p. 84。

日常生活のなかには、先人の足跡が無数に残されているのである。

沖縄の昆布消費量は、全国でもトップクラスである。また沖縄で消費される長昆布は、ダシではなく食用にする種類のものなので、その量がどれだけ多いかをうかがい知ることができよう⁵⁸⁾。

⑤ 五分類目は現代の促成昆布時代であるが、本稿と直接かかわりがないのでここでは触れない。

以上が、近世から近代にいたる、日本とその周辺地域との関係史の概観であった。昆布の歴史に重ねて見ると、より具体的に可視化できると思う。江戸幕府が行った蝦夷地への侵略行為が、結果的に昆布など北方の豊かな産物の供給を促し、それが遠く離れた琉球に、さらには中国へともたらされていった。昆布という商品には何の罪もないのだが、動かす側の人間には常に思惑がついてまわったのである。

時代はいよいよ明治に入る。1869年、アイヌ人たちの生活の本拠である蝦夷地を北海道と改称して日本に編入し、75年の樺太・千島交換条約によりアイヌ問題を、日本の国内問題に包摂した⁵⁹⁾。

1871年11月、琉球宮古島の官民たちが、年貢を納めるために那覇に赴いたが、その帰り台風にあい台湾南部の牡丹社近くに漂着した。五十数名の漂着民がいたが、牡丹社の先住民にその多くが殺され、助けられた十数名は福州の琉球館に送られた後、那覇に戻った。これが、いわゆる牡丹社事件である。この事件が、近代日本最初の海外出兵につながる⁶⁰⁾。

これに先立つ同年7月、明治新政府は廃藩置県を断行し、さらに翌年には琉球王国を琉球藩に組み入れ日本の国土の一部とする。1869年の版籍奉還により、薩摩藩は封建的領主権を放棄し鹿児島藩に転換しているので、本来なら琉球支配権も島津家から離れて、天皇に帰属しているはずであった。ところがその後も、鹿児島藩による琉球王国管理が継続していたので、廃藩置県を機に琉球王国との関係を再編成して、新国家体制内に位置づけなおす必要が生じたのである⁶¹⁾。

清国からすれば、琉球を15世紀から進貢・冊封の君臣関係にあるとみなしているのだから、これをすんなりと容認することはできない。そうしたなか牡丹社事件は、清朝との外交問題を作り出す絶好の口実になった。

1874年5月、明治政府は「人民保護義務」を大義名分に台湾に出兵し、清朝に迫って琉球問題を一気に決着させようとしたのである。結果的に日本は清国から、多額の賠償金を獲得したばかりでなく、琉球が日本に帰属すると言質をとったのであった⁶²⁾。そして1879年には琉球処分を強行する。

台湾出兵の翌年（1875年）におこった江華島事件をきっかけとして、日本は朝鮮と「日朝修好条規」を締結し（1876年）、朝鮮を開国させることに成功する。この後も朝鮮では抗日暴動であ

58) 総務庁統計局『家計調査年報』2004年, p. 325。04年「年報」における、沖縄の昆布購入量は突出しているわけではない。しかし、1994年の「年報」によると、沖縄の購入量は全国平均の約2倍だという結果になっている。この調査の数字は、年によりばらつきが大きい。

59) 屋嘉比収「近代沖縄におけるマイノリティー認識の変遷」『別冊環 琉球文化圏とは何か』藤原書店、2003年, p. 240。

60) 戴國輝『台湾』岩波書店、1988年, pp. 56～57。

61) 毛利敏彦『台湾出兵』中央公論社、1996年, p. 15。

62) 同上書, p. 58。

る壬午軍乱（1882年）や、日本の支援を受けた金玉均らによるクーデター（甲申事変、1884年）が起こったが、その度ごとに日清双方の対立は深刻の度を深めていった。欧米列強に伍して生きることをめざす日本と、旧来からの華夷秩序に固執する清国にとって、琉球や朝鮮という共通の「接点」をめぐる争いは、もはや避けて通ることができなかったともいえる⁶³⁾。

1894年、朝鮮で李朝の封建支配に対する農民の反乱が起こる。甲午農民戦争（東学党の乱）である。朝鮮政府は清国に救援を求めるが、これに対して日本は直ちに出兵した。日本軍は朝鮮王宮を占領して、朝鮮政府に清国軍を撤退させるように要求した。そして日清戦争が始まるのである⁶⁴⁾。この後1910年に、日本が韓国を併合し、朝鮮総督府のもとで植民地支配を開始することにつながっていく。

1895年、日清戦争の終結により締結された下関条約によって、日本は台湾、遼東半島、澎湖諸島を清国から割譲する。ところが、「露・仏・独」の三国干渉により、日本は遼東半島の返還にやむなく同意し、政府はロシアの不凍港獲得に向けた南下に対する「臥薪嘗胆」を唱えて、さらなる軍備拡張を推し進めていく⁶⁵⁾。

平井正治によると、大阪の内国博覧会では、会場に世界一大きな大砲を据えて、それをロシアの陸軍大臣を招待して見せつけたのだという。この大砲が翌年に勃発する日露戦争において、実際に旅順の203高地でつかわれたというのだから、なんとも生々しい博覧会秘話である⁶⁶⁾。

こうしてみると、内国勸業博覧会の「人類館」は、江戸期に侵略した「先行」植民地と、明治以降に領有した「新規」の植民地の人たちを、同時に見世物にする企画だったことがわかる。いわば「人類館」事件は近代日本を象徴する出来事であるとともに、それよりさらに300年以上も前から、「50年戦争」の予兆となる動きが見られたことを、明確に映す鏡のような役割を果たしているのであった。

5 ま と め

沖縄の人たちが、大阪をはじめとする本土に移り住むことには、就職差別などのさまざまな困難が伴った。粗末な住居での暮らしは偏見の根拠となり、常に周囲からの冷ややかな視線を意識しつつ、生活せざるをえなかったのであった。そこから彼らは苦労を重ねながら、日本社会において一步一步足場を築いてきた。おそらく「日本人」には、たやすくうかがい知ることのできぬような日常生活だったと思う。

近年の日本社会においては、沖縄が一種のブームになっているともいえる。音楽番組には沖縄出身の歌手が何人も出演し、彼ら抜きでは紅白歌合戦も成り立たない。また連続テレビ小説で人

63) 毛利, 前掲書, p. 187.

64) 海野福寿『韓国併合』岩波書店, 1995年, pp. 84~94.

65) 半藤一利『昭和史』平凡社, 2004年, p. 12.

66) 平井, 前掲書, p. 38.

気を博した「ちゅらさん」は、そうしたブームの象徴でもある。三線やエイサーをやってみようという若者も増加している。それに「長寿の島」の伝統料理は、身体にいいと評判であることから、沖縄はいまや「癒やしの島」としてもはやされているのである。こうして沖縄に対するイメージは、人類館にみられたような「負」から「正」へと急転換を見せているのである。

しかし、かつてを知る者からすると、このような「ブーム」に複雑な思いがあるのもまた事実かもしれない。韓国のドラマ「冬のソナタ」が大ヒットしたことで、「韓流」が一種の社会現象となっている状況と、どこか通じるところもある。さまざまな辛酸をなめてきた年配の在日コリアンたちにとって、突然巻き起こった「韓流」現象は、正直どう受け止めてよいものかという戸惑いのほうが、じっさいのところ少なくないだろうからである。

たしかにこの頃のブームは、イメージ先行のきらいがある。そんな風潮に対して、きわめて辛辣な意見を持つ人が増加しているともいわれる。一部の沖縄人からは「日本人」の振る舞いは、見ているだけでも不愉快だという意見が、実際のところ聞こえてくるのである。沖縄に対する差別と同化の歴史を知らない日本人が、自分の興味あるところだけをつまみ食いしているという受け取り方が、確実に広がりつつある。

苛立ちが増幅していく背後には、かつての戦争で本土防衛の捨石にされ、膨大な数の死傷者を出したという沖縄の痛ましい記憶が確実に横たわっている。さらに米軍基地という理不尽な存在が、大きな影を落としていることも間違いない。当事者である沖縄住民の意見がほとんど反映されない現実を見るにつけ、いつになれば沖縄に戦後は訪れるのかと人びとは考え込んでしまうのである。

重苦しい歴史の記憶といつ変わるとも知れぬ現実との苦闘が、沖縄の人たちを追い詰め続ける。そんな現状をすこしでも改めていくためには、まず日本人がこれまでどのようなまなざしをもって沖縄と接してきたのかを、やはりもう一度検証しなおすより他なさそうである。過去から現代に至る、わたしたちがつくってきた関係の行き違いは確かに大きい。だからこそ、その事実を直視することでしか、未来の展望は開けてこないように思えるのである。

21世紀に入って、アジアは新たな時代を迎えようとしている。そのことについては、誰もが異論のないことだろうと思う。しかし、日本とアジアとの関係は、いまでも戦後処理の問題にぶつかると、立ち往生してしまう。それは、最近の靖国問題を見ても明らかである。過去の戦争について日本人は、いつのまにか自分たちを被害者の側に位置づけてはいないだろうか。自らの加害者に目をつむり、被害者の文脈で戦争を語ろうとすると、必ず論理に破綻をきたす。沖縄との関係についても、これらとどこかで通底しているように思えてならない。

日本人が新しい時代において、他者と良好な関係を取り結んでいくためには、自分にとって都合の悪い過去を不問に伏すような態度では、けっして相互の理解や信頼は生まれてこないのではないだろうか。過去を検証するということは、かつて日本人が「人類館」で見せたように、まるで「西洋人」のようにふるまいながら、アジアの隣人に接したその態度をどのように考えるのかが問われているのである。そういうところからも、わたしたちはつねに歴史を問い直す作業を

怠ってはならないのである。

ここでもうひとつ触れておかなければならない話がある。「人類館」が問題になった際、「琉球新報」紙上で抗議が展開されたというふうに述べた。一連の記事のなかに「人類館を中止せしめよ」と題するものがある。

「我輩は日本帝国に斯る冷酷なる貪欲の国民あるを恥つるなり。彼等が他府県に於ける異様の風俗を展陳せずして、特に台湾の生蕃北海のアイヌ等と共に本県人を撰みたるは是れ我を生蕃アイヌ視したるものなり。我に対するの侮辱豈これより大なるものあらんや。本県人民如何に無神経なりと雖も、如何に意気地なしと雖も、此侮辱を甘受するものあらんや」⁶⁷⁾。

簡単に言えば、沖縄人が「人類館」で、「アイヌ」や「台湾の生蕃」と同等に扱われたことに、この筆者は憤慨しているのである。差別を糾弾しながら、いつのまにか自分も差別する側にまわってしまっている⁶⁸⁾。

人は何かのきっかけがあれば、容易に差別者に転化しうる可能性があることを、この記事は例示しているようにも見える。これは人間という生き物の弱さをよく表している。あらゆる人間が、こうした弱さを内包する生き物であることを自覚することで、その先に新たな世界が開けてくるのだと思う。

いま、西宮辺りの武庫川河畔は、近隣住民の憩いの空間となっている。松林が連なる美しい環境のもと、散歩やジョギングをする人たちで終日賑わっている。こうした良好な景観のなかには、数知れぬ朝鮮人や沖縄人たちの労苦が刻まれている。しかし、そのことを知る人はおそらく多くはない。

わたしたちが暮らす身の回りには、武庫川のような場所がおそらくいくつもあるに違いない。そのほとんどが、強制連行されてきた朝鮮人や中国人たちによる、血のにじむような労働の跡である。しかし、その苦難は大地に溶け込んでしまい、いくら目を凝らしても判別がつきにくくなっている。

こうした土木工事だけではなく、各地に残る数多くの物産が、人びとの足跡を伝える歴史遺産なのである。豊臣秀吉の朝鮮侵略では、陶工や学者など数多くの人びとが捕虜となり連行され、さらに殺害した民衆の耳や鼻を切り取り持ちかえるという残虐行為が行われた。薩摩焼や有田焼など有名な焼き物産地の多くが、連行された朝鮮人陶工により開かれた事実は、重い歴史のうえに日本の生活文化が息づいていることを示している。

67) 琉球新報、1903年4月2日、『沖縄県史19資料編9』国書刊行会、1969年、p. 180。

68) 屋嘉比、前掲書、p. 243。屋嘉比は（太田朝敷が書いたとされる）この記事を、「差別された者がそれから脱却するために差別意識を内面化し、他の少数民族を差別視する抑圧移譲の構造である。それは言い換えると、自らを擁護しその優位性を主張するために、他の少数民族を差別し排斥する論理だといえよう」と指摘する。

金城勇「学術人類館と沖縄」演劇「人類館」上演を実現させたい会編『人類館』アットワークス、2005年、p. 57。また金城はこの記事について、「抗議キャンペーンの紙面に満ち溢れた他民族への差別意識は、当時の皇民化教育や風俗改良運動によって日本人への同化を強力に推進する立場にたった編集方針から生まれたのである」との見方を提示している。

また高知県の硬い豆腐は、朝鮮人により伝えられたという話がある。陶工たちと同様に、朝鮮から連れてこられた朴好仁という武将たちが、鏡川のほとりに開設された「豆腐座」で、豆腐づくりに従事したことに起源をもつのだという。じっさい「豆腐座」のあった付近には、現在「唐人町」という地名が残っている⁶⁹⁾。

朴好仁の子孫が、高知県南国市に住んでいるというので訪ねたことがある。秋月信雄さんという方であるが、自分たちの祖先が朝鮮から連れてこられたということを、はっきりと自覚して生活しておられたことが印象深い。

わたしたちの生活は、交易などの社会のネットワークにより成立している。それは昔も今も変わらない。人びとの暮らしはけっして自己完結的なものではなく、外部と広く交渉を行なう開放性を基礎としていた。事物は人に伴いながら、常に移動する。同じ場所だけに留まっているわけではなく、そこに数多くの民衆が介在しながら、新天地を目指すのである。

わたしたちが住む日本列島も例外ではない。「日本固有の文化」という表現をよく聞く。しかし、稲作や仏教を例にとっても、列島社会に固有のものではない。醤油や味噌そして豆腐だって、元をたどれば他所からもたらされたものである。わたしたちは食べ物のみならず、多くの文物を中国、朝鮮半島、その他アジア諸地域等から学んできたのである。地球上のあらゆるところで、同じような文化の伝播が繰り返されてきた。だから「固有」という考え方自体がかなり曖昧で、内容に乏しいということがよくわかる。

民衆の移動は交易だけとは限らず、これまで述べたような戦争による悲劇性を伴う事例もたくさんあった。そういうさまざまな出来事のうえに、ようやくわたしたちの現在がある。

先述した沖縄ブームは、たしかに軽佻浮薄のそしりを免れぬところがあるのかもしれない。ただ、そうした非難を突き詰めていった先には、関係を謝絶する道しか残されてこないような気もする。たしかに沖縄の人たちが憤る気持ちはわかる。しかし、そのことが結果的に「角を矯めて牛を殺す」ことになるのではあまりに悲しい。

昨今の沖縄ブームにおける「日本人」の興味は、その多くが物象化されたモノとしての沖縄に向かっていることも否定できない。それが沖縄の人たちを苛立たせる原因となっている。しかし悪評高いブームも、見方を変えてみると、けっして悲観的な要素ばかりだともいえない。何度も沖縄に通いながら、さまざまな話を地元の人から教わるうちに、やがて根底にある重要な問題に目を開かされるかもしれないからである。なんといっても若者たちの行動力は、社会を変える可能性を秘めている。

お互いが理解しあうためには、永続的な交流が何よりも重要である。皆が行ったり来たりしながら、話し合いを繰り返すことで、やっと分かりあえる道が開ける。迂遠には見えても、これがやはり近道のような気がする。こうした民衆交流の積み重ねこそが、未来を拓く礎となるのである。

少し長くなるが、この論考の最後に「菜の花の沖」から司馬遼太郎の言葉を引用したい。

69) 鄭大聲「食文化—朝鮮と日本のつながり」『アジアの食文化』大阪書籍、1985年、pp. 133～148。

「昆布は漢語でなさそうに思えるから、あるいは蝦夷語（蝦夷はかかわらずしもその後のアイヌではない）だったのではないか。

嘉兵衛は、蝦夷地から昆布を運んだが、鯨や鮭なども運んだ。いずれも、アイヌ語かと思う。

鯨は、ふるい和語で「カド」といったということは、この作品のなかでもふれた。いまでは、カドということばは、にしんの子を「カヅ（カド）ノコ」とよぶ場合にのみ生きている。シャケ・サケについては、その語源がはっきりせず、アイヌ語であるとはきめつけがたいが（アイヌ語の鮭（スケ）に通うという説もある）、ともかくも、古代の東国で成立したことは確かであることはまちがいない。

ニシンは、日本海広域海上交易の確立とともに使われたように思える。遠くから遠くへ運ぶ商品になってしまった「カド」は、もはや自然に遊んでいる「カド」という魚ではなく、外来語をもと商品語としての「ニシン」というものなのである。（中略）

ニシンは、嘉兵衛たちが蝦夷地から棉畑の魚肥として運んでくる商品であればこそ「ニシン」であり、秋田あたりの入江でとれて、土地でそのまま夕食の膳にのぼる自給経済的な場合ならば「カド」でいいのである。

昆布も、奥州あたりの磯の底にはえているぶんなら、和語の広布（ひろめ）でよく、広域経済圏をめぐっている商品としての場合は、昆布でなければならない。昆布が、なんとなくアイヌ語であろうと想像するのは、そういう結果から帰納してのことである」⁷⁰⁾。

これは司馬の慧眼である。この洞察力には、さすがに驚かされた。そうだ昆布もニシンも広域に動くからこそ、アイヌ語が付随してきたのである。そこにはアイヌの悲しみも付着している。それを食べるわたしたちは、名前の由来なんていつしか完全に忘れ去っていたのである。蝦夷地の産物が四方八方へ移動しながら、そこに涙なんかも引っ付いていたのである。わたしたちはすっかり忘れていた。

事物には、それぞれに意味や背景がつきまとう。時にはこんな涙を思い出したい。沖縄の食卓で昆布を食べながら、アイヌ人の嘆きに思いを馳せたりする、そんな思いやりがこの時代必要な気がしてならない。

（受付 2005年12月15日）

70) 司馬遼太郎『葉の花の沖（四）』文芸春秋、2000年、pp. 398～399。